今を輝く人に聞く 21

まちひと ZOOM!!

中心市街地の活性化にシャッターアートを

中山 良太（なかやま りょうた） さん（松が岬２丁目）

[Profile] 秋田県湯沢市出身。山形大学工学部システム創成工学科の３年生。シャッターアートのほか、様々な地域づくり活動を行う。

空き店舗のシャッターをアートで明るくしたい

11月中旬、ナセBA西側にある旧太田食肉店の店舗のシャッターにかわいらしい妖怪の絵が現れました。今回はこの作品を手掛けた大学生、中山良太さんにインタビューをしました。

空き店舗が並ぶ商店街に寂しさを感じた中山さん。地域課題を学び解決のために取り組む大学の講義を足掛かりに、シャッターに絵を描きまちの雰囲気を明るくしようと決意します。

ミーティングを重ねる中で空き店舗のオーナーと親しくなり、製作は６月にサビを落とす作業から始まりました。シャッターに下地を塗り、プロジェクターで原画を投影、下書きをして色付けへ。中山さんは「原画製作が一番大変でした。たくさんの人に聞き込みし、まちと調和しつつも意外性のある絵のテーマを模索しました」と語ります。

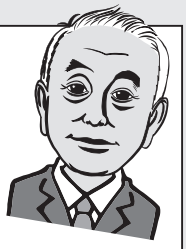
４か月間の試行錯誤の末、辿（たど）り着いたテーマは「百鬼夜行（ひゃっきやぎょう）」。そこには２つの意味が込められています。「活動に協力してくださった地域の方をモチーフとして絵に登場させること。そして、図書館と飲食店が隣接するという昼と夜の顔を併せ持つまちの特徴を表現することです」。中山さんはこれらを妖怪が列をなし黄昏（たそがれ）の中、夜のまちへと行進していく姿に重ねました。

中山さんに今後の意気込みを聞きました。「今回は米沢松川ライオンズクラブや芸術文化協会の協力もあり完成に至りました。人と人との繋がりが生まれ、『地域のために何かしたい』という思いが高まったと思います。来年以降もカタチに残るものを製作し、商店街を活気付けたいです」。

おしょうしなよねざわ

今月のはなし

冬の足音



早いもので今年も残すところ、あとひと月となりました。この1年を振り返ると、冬は厳しい寒さの中での大雪、夏は雨の降らない日々が続き、水不足などが市民生活に影響を及ぼしました。本市においては幸い大きな被害は無かったものの、自然災害の恐ろしさを実感する年でありました。

さて、市庁舎から眺める街路樹や公園の樹木の紅葉も終わりを告げ、風に舞いながら落葉しています。吾妻の山にも雪が降り、いよいよ冬の足音が聞こえてくる、そんな季節になってきました。

雪囲いや畑の片付けを終えたところも見受けられますが、白菜や大根の収穫がこれからといったところも多くあります。我が家もそうです。そう言えば、冬の伝統野菜の一つ、雪菜の収穫も始まります。雪菜は収穫したものを別の畑へ床寄せし、雪が降るのを待ちます。雪を被ることでおいしくなったり、大きく成長させることができるのですね。

寒暖差が大きく、四季がはっきりしている米沢だからこそ生み出される自然の美しさやおいしい食材。こうした米沢の魅力を発信していくため、『挑戦と創造のあかし・米沢品質』のスローガンのもと、ブランド力を高め、磨き上げていきましょう。

厳しい冬が待ち受ける、雪国米沢。慌ただしい年の瀬を迎えます。皆様、健康にご留意ください。

米沢市長 中川勝